千葉大学教育学部研究紀要　第56巻　438～431頁（2008）

行動する少女、結婚する女性――再話における改変・創造された女性造型をめぐって――

佐藤宗子
千葉大学・教育学部

Active Girls End Up Marrying: Recreated Figures in Retold Stories

SATO Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

これまで戦後の「少女」向け翻訳・再話叢書を検討してきた中からは、行動的な少女造型が浮かび上がってきていた。今回は、その先にどのような結末が予定されているのかをあわせて念頭に置き、戦前の『少女倶楽部』に連載された、佐藤紅緑の「緑の天使」を中心に検討することとした。ディケンズ『オリヴァー・トゥイスト』を原作とするこの翻案に登場する三人の少女、雛子の創造およびお玉（玉子）と雪子の改変された造型を分析することを通して、少女の行動力がハッピー・エンドへの改変をも導いたこと、同時に大団円ではいずれも結婚が報告されていることの意味を考察した。行動する少女の行く末として結婚が予定されることに関しては、戦後の「講談社マスコット文庫」などにも言及し、時代性の中での翻訳者・再話者の意識のあり方について、その可能性と限界とを指摘した。

キーワード：児童文学（Children's literature）　翻訳（translation）　再話（retold stories）　少女（girl）

一

第二次大戦後の一九五〇年代から七〇年代にかけて、とくに「少女」向けと銘打たれたいくつもの翻訳・再話叢書が刊行されていたこと、その中で対象読者である少女たちに対して、あるべき「少女」の姿が翻訳者・再話者によりつよく提示されていたことは、この二年ほどの研究成果から明らかになってきた。（小論「「少女名作」という発想――戦後の再話叢書の一側面――」（『千葉大学教育学部研究紀要』第五四巻、二〇〇六）および小論「「少女」が「推理小説」を読む時――戦後のジュニア向け翻訳推理叢書にみる「読書」への期待――」（同誌第五五巻、二〇〇七）を参照されたい。）

端的にいうなら、そこでは、広く十代の年齢幅の全体を「少女」期とし、時に理知的な思考も働かせつつ、とにかく行動的であることが称揚されていた、といっていいだろう。ときに二十歳前後まで含めたハイティーンの「少女」は、学生生活を送るのみならず職業にもついている場合がある。そうした事例も含めて、現在の日々の生活をいかに活動的に過ごしているか、また一旦事あらばいかにすばやく己が正義感に照らして対処できるかが、作中の少女主人公たちに課せられた使命であると同時に、読者となる少女たちにも、期待されていたのである。

また、そうした規範となる「少女」イメージが海外から移入されたのは、第二次大戦前からの日本におけるいわゆる少女小説に対して、感傷的で扇情的、悲哀にみちて主人公がひたすら受動的なものなどの否定的評価がそれら翻訳者・再話者たちから下されたためであった。そして、それに代替するものとして、とくに英語圏の少女向け読物が、民主主義的な社会の風を十分にはらんだ、理想を体現しうる作品群として選ばれたわけであった。

ところで、そうした望ましい「行動的な少女」時代をすごした後、彼女たちはど

のような運命をたどるのであろうか。「少年」に拮抗する行動力や知性を備えた「少女」は、社会にどのように受け入れられていくのか。「少年」の未来がさまざまな職業選択の可能性を秘め、多岐にわたる少年期の夢が将来に向けての基盤となるだろうことを、児童文学の作品群の中でもしばしば確信しうるのと同様のことが、果たして、「少女」の場合にも見られるのか。

どうもそこには、ある「限界」があったのではないか、というのが私の現在の仮定である。では、それはどのようなかたちに収斂するのか、またそれはなぜなのか。更に、そのことはどう評価すべきなのか。

本稿では、その原型にもなりうる事例として戦前の一再話をとりあげ、そこから右のような問題を考える契機としたい。取り扱うのは、チャールズ・ディケンズ『オリヴァー・トゥイスト』を原話とした、佐藤紅緑による再話「緑の天使」である。昭和六年から七年にかけて『少女倶楽部』に連載され、戦後も単行本化されたことが確認できる（『緑の天使』ポプラ社、一九四八。その後、多少の装丁をかえ、「少女小説傑作選」〔二四〕として五五年にも刊行）本作品をもとに、「少女」の行動性とその先にあるものを、検証していくこととする。

なお、本稿の中での引用は、新字・旧仮名を基本とした。また、『緑の天使』の作品からの引用に当たっては、『少女倶楽部』連載のものは一九三二年二月号未見のため、四八年刊行の単行本をもとにした。

二

具体的な検証を始める前に、本節ではまず、原作者ディケンズと『オリヴァー・トゥイスト』について、その日本での紹介について、さらに連載当時の再話者佐藤紅緑と掲載誌について、簡単に確認をしておくこととしよう。

原作者チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）は、一八一二年にイギリスに生まれ、七〇年に亡くなった。『ボズのスケッチ集』で注目され、『ピクウィック・クラブ』で流行作家となった彼は、その後も『デイヴィッド・コパフィールド』や『クリスマス・キャロル』はじめ、多くの作品を世に送ったが、代表作の中の一つが、『オリヴァー・トゥイスト』（*Oliver Twist*）である。最初は一八三七年から三九年にかけて雑誌連載され、連載完結前の三八年に、初版の三巻本を刊行したという。その後も何度も手が入れられたというが、たとえばちくま文庫収録の小池滋訳『オリヴァー・トゥイスト』（一九九〇、筑摩書房）は、上下二冊で本文七百ページを優に越える大部の訳出作品となっている。（なお、上記の説明は、同文庫下巻「解説」による。）全部で五一章に及ぶ作品の流れは、後の節で多少の紹介をすることになるが、複雑で、人間関係も入り組んでいる。

ディケンズの日本への移入に関しては、近年刊行された『明治翻訳文学全集〈新聞雑誌編〉六　ディケンズ集』（川戸道昭・榊原貴教編、一九九六、大空社）や『図説　児童文学翻訳大事典』（児童文学翻訳大事典編集委員会編、大空社・ナダ出版センター、二〇〇七）の第三巻などが参考になる。

たとえば前者の「明治翻訳文学年表」によれば、『オリヴァー・トゥイスト』の初めての紹介は、柳田泉によると注記されつつ一八八五年（明治十八年）の『絵入朝野』掲載作が挙げられているが、後者では初訳として、『人民新聞』連載（一九〇七年一月一日～二十三日）の吉田碧翠訳「オリヴァー・トウヰスト」の冒頭部分が掲げられている。その後、山崎貞訳注『英語の日本』掲載「おとむらい」を経て、初期の代表的翻訳といえる堺枯川「小桜新八」（『都新聞』一九一一年一月十六日～五月三日）が世に送られる。この「小桜新八」は、前者に連載のかたちで収録されており、それによれば人名のみならず舞台も日本に移し替えた、完全な翻案といえるだろう。挿絵からも、着物姿や女性の髪形、ランプに照らされた室内の様子など、明治期の同時代を設定として翻案がなされたことがわかる。

その後、一九三〇年には「世界大衆文学全集」第九巻（改造社）に馬場孤蝶訳『オリヴァー・ツウイスト』が収録されているが、一九三六年からは、松本泰・松本恵子訳の「ヂッケンス物語全集」（中央公論社）が刊行されるにいたる。全十巻の本全集は、基本的に人名を日本化した半翻案といえるもので、『オリヴァー・トゥイスト』はこの全集の第一巻に『漂泊の孤児』という訳題で収められた。冒頭を少し引用してみると、「織部捨吉が呱々の声をあげたのは、倫敦から三十里程隔れた和陸州練馬市の救貧院の一室であつた。」とあり、人名は日本化し、地名は適宜日本風にもされているが、基本として舞台はイギリスであることがわかる。たまたま手元には、一九四六年に不破書房から上下二巻で刊行された版があり、この訳出作品は戦後も手に取る機会があったことがわかる。

これらはいずれも、一般向けの翻訳や翻案であるが、児童向けの版もいくつか、紹介しておこう。第二次大戦後の一九四八年には、「世界名作物語」（講談社）に、

前編・後編に分けて、片山昌造訳『オリヴァー・ツイストの冒険』が収録されている。前編冒頭には、「片山昌造の「オリバー」への序」というアラン・タイスリッジの推薦の文章がある。続けての片山による「この本のこと」によれば、一年前にイギリス人の知人から原作について聞き、読み出すと「強く心をひかれ」たことが翻訳のきっかけだという。さらに、「オリバーが、いまの日本の子に、にているようにぼくは思い、日本の子に、オリバーという少年を紹介してあげたい」と述べる。敗戦後の混乱した状況の中で生き悩む少年少女に対して、いわば悩みを共有しうる存在として主人公を捉えた様子がうかがえる。

この時期には、他の訳者も似た感覚を持っていたらしい。たとえば奈街三郎は、『オリバー・ツイスト』（大雅堂、一九四九）の「まえがき」で、次のように言う。「しかし、それでは私たちの日本、文化国家などという今の日本に、はたしてオリバーのような不幸な少年は、ひとりもいないでしょうか？（略）そして現代は、ひとりやふたりのオリバーがすくわれても、私たちの心から社会的なくらいかげは消えません。／すくわれないオリバー少年が、ひとりもいない日本、平和なあたたかい全世界――それを打ちたてるのは〝これからの人〟――少年少女諸君であることを、諸君のなによりのほこりとしてください。」このように、日本の現状とかさねて、作品内の状況を感じとることが提起されている。

また、片山訳では訳題に「冒険」という語が加えられたが、ほかに持丸良雄（『オリバーの冒険』、偕成社、一九五一）や松本恵子（『オリバーの冒険』、「新児童文庫」二〇、三十書房、同）も、やはり「冒険」を入れている。その一方、東野達夫（『孤児オリバー物語』、「世界名作物語」二六、一九五二）や船木枳郎（『みなしごオリバー』、「学級文庫」二・三年生、日本書房、一九五七）のように、「孤児」「みなしご」を入れる例もある。一見すると相当イメージが異なるが、実は、主人公の少年のそもそもの境遇、あるいは展開過程での経緯のいずれかに重点を置いた補足の語を入れたわけで、長編を簡略化する上での主人公への焦点化を示すという点では、似通ってもいる。

ここでは戦後早い時期の何作かをあげたが、その後ももちろん、世界名作の一環として、全集などにもしばしば入れられたりしてきた。もっとも、八〇年代あたりを境に、児童文学界における名作全集の減少とともに、訳出の機会自体がほとんどなくなっているようである。

では次に、佐藤紅緑の翻案の状況を確認しておこう。「緑の天使」が掲載されたのは、『少女倶楽部』一九三一年（昭和六年）八月号から翌年三月号にかけてである。掲載の前月に当たる七月号には、五ページにわたる予告が載る。どうやら、本来は七月号から始まる予定であったのが、一か月延びたために、それだけのページを費やして前宣伝をすることになったらしい。その二ページ目からの「『緑の天使』ときまるまで」（十介記）には、記者が紅緑を訪問したかたちで両者のやりとりが記されていく。それによれば、窓外を見ながら紅緑が「人間の心持も常に五月の青空の様に、潑剌と新鮮で、そしてその底に、甘い優しいものを包んでゐたいものだ」と述べ、そこから題を「緑の天使」と決める。それは「やはらかな、清純な少女の心持にぴつたりした題」だという。さらに、「人間は美しい天性を持つて居る。処がまはりの力によつて或る少女はその美しい天性を曇らしてしまふ、けれど或る少女は、どんな苦しい、辛い、悪い、醜い、出来事に逢つても常に美しい魂を汚さない様に守り育ててゆく。どんな事があつても傷つけない。それは丁度、冬の冷たい風や雨や、雪に凍て付いた地殻の冷酷な鞭にもめげず、じつと己を守り育ててやがて春を待つ草花の様なものだ。日が暖かくなり地が柔かくなる、芽を出した草花はやがて小さな赤い花をつける。幸福の歌を唱う。「緑の天使」にはその様な女の子を書いて見たい。」と抱負を語る。そして、その女の子は緑の服を着ているのかとの問いに、「ウン、服もだが、心は常にあの五月の空の様に、生き生きと、希望を失はない、そして優しいものを持つて居るのだ」と答える。

このように、話の構想が『オリヴァー・トゥイスト』に依拠するものだという点には、まったく言及がない。また、主人公である少年への言及もされず、もっぱら、登場する少女の「心」――「美しい天性」への執着を見せる。つまり、ここで示されるのは、少年を主人公とするディケンズの作品から、少女に注目すべき作品への、転換――といってよかろう。

原拠がありつつ翻案化された作品ということに関して言えば、実は、同時期に紅緑は、『少年倶楽部』でも、ジュール・ヴェルヌの『二年間の休暇』に基づいて登場する主要な少年を日本人に変更した「少年聯盟」という作品を、連載している（一九三一年八月号～翌年六月号）。そちらの場合は、原話への言及も見られるのだが、同時に二つの再話を並行執筆していた点については、別の機会にもう少し検討してみたい。また、「緑の天使」連載中の『少女倶楽部』には、ヴェルヌの『ミシェル・

ストロゴフ』をもとにした翻案である、千葉省三「陸奥の嵐」（三二年一月号～十二月号）と、森鷗外の「山椒大夫」をイタリアを舞台にした話に置き換えた、宇野浩二「海こえ山こえ」（三二年一月号～六月号）も掲載されていた。これも、興味深い点ではあるが、ここではとりあえず、広く翻案や再話をめぐる状況の紹介として押さえておくにとどめる。

では次に、「緑の天使」とは、実際、どのような作品であるのかを見ていくことにしよう。

三

本節では、はじめに原作の梗概を大まかに捉えた上で、「緑の天使」の概要を見る。そして、その後、何がどのように変えられたのか、乃至作られたのかを考えていくことにする。

『オリヴァー・トゥイスト』は、すでに述べたように相当な長編であるため、登場人物も多く、またそれらが絡み合った筋立てとなっている。たとえばディケンズ・フェロウシップ日本支部のホームページ（http://wwwsoc.nii.ac.jp/dickens/）には、主要作品の「梗概」というページがあるが、そのなかで本作の梗概は、四百字詰原稿用紙換算で十枚近くにもなるほどの分量となっているほどである。したがって、ここでは時系列に沿った紹介というのではなく、再話と対照させる都合上、全体の構成を見ながらの紹介としたい。

本来は相応の家柄の両親を持ちながら、事情あって救貧院で生母が出産後、すぐ死んだこともあり、孤児院育ちとなった主人公の少年オリヴァー。彼は、やがて徒弟に出された先を出奔、ロンドンに向かう。そして悪党のフェイギンの手に落ちた後、犯罪の片棒担ぎを二回にわたり、担わされそうになる。最初は紳士ブラウンロウに、二度目はメイリー夫人の家に保護されるのだが、ブラウンロウ氏は実は、オリヴァーの実父の親友であり母アグネスの肖像画を預けられた人物、メイリー夫人の養女のローズは実は、アグネスの実妹すなわちオリヴァーの叔母であることが、最終的にわかる。

途中、フェイギンのもとを訪れ、オリヴァーの堕落を図るよう依頼するモンクスという男が登場するが、本名エドワード・リーフォードというこの男が、実はオリヴァーの腹違いの兄で、遺産相続をめぐる思惑から、オリヴァーにとって、陰の脅威となっていたのだった。

また、一度目のオリヴァー保護の後、お使いに出たオリヴァーを再びフェイギンの下に連れ戻す役割を果たしたのが、フェイギンの仲間サイクスの情婦ナンシーであったが、その後彼女は、何かにつけてオリヴァーをかばうことになる。とくにフェイギンとモンクスの密談を盗み聞きし、それを二度目の保護者の一人ローズにわざわざ伝えにいく。これが一つの転機となり、最後のブラウンロウによる全体の謎解きとオリヴァーの地位回復につながっていくのだが、ナンシー自身は、その過程でいわば敵への密通がばれて、サイクスにより無残に殺される。

サイクスやフェイギンも、結局はみじめな最期を迎える羽目になるのだが、ナンシーの犠牲のもとに、オリヴァーは経済的にも人間関係としても、幸せをつかむことができた。付随的に、身元が不明であったローズも、それがはっきりするのみならず、幸せな伴侶と結ばれることになる。

次に、「緑の天使」の梗概であるが、こちらは連載の一回分ずつを紹介がてら、説明していこう。ちなみに毎回のタイトルは順に、「若芽」「でたらめ小僧」「浮沈」「夜光の玉」「傷つける鳩」「珠の如く」「愛！」「天使園」とされている。

「若芽」ではまず、托児所から学校に通う小林忠男（十一歳）と桃井雛子（十歳）が登場する。托児所の主人松下五助の不十分な養育のため、体操の時間に倒れた忠男。そのため町長らから灸をすえられた五助は、その後、忠男を靴直しの赤蔵のもとへ小僧に出す。忠男はその不正な仕事ぶりを知り、雛子にそっと別れを告げて、逃げることにする。「でたらめ小僧」では、埼玉・久喜方面からやってきた忠男を、十四、五歳の少年でたらめ小僧が、千住あたりで拾い、東京・浅草へと連れて行く。五十恰好の「先生」と呼ばれる男が百介で、実は少年たちを使って泥棒などを働いているのであった。また、百介の家では十四、五歳の女の子お玉が、使われていた。ある日、忠男は神保町の書店へと連れられていく。

「浮沈」では、そのとき忠男は、窃盗犯とみなされ捕まるが、当の老紳士の証言で救われる。そしてその紳士、理学博士である門野の小石川表町の家に連れて行かれる。一方、百介は仲間のかんしゃくの飛蔵などとともに協議、お玉に成り行きを探らせるが、お玉は忠男のためにうそをつく。（ここでお玉の身の上も語られる。女中奉公の母、本人も十二歳から百介の家に奉公、まもなく母が死ぬ。母の病中と葬式の費用を百介に出してもらったために、終身の奉公となった。）さらに忠男に

危険を知らせようとするが、かえって百介らに不審を抱かれる。「夜光の玉」では、計略をしかけられたお玉が、小石川に出かけ、博士邸のやしない児となった忠男が、お使いで大塚の眼鏡屋に行こうとしたところと出会う。そこを、お玉のあとをつけてきたでたらめ小僧らに捕まり、今戸の飛蔵の家に連れて行かれる。忠男は、郊外の別荘への押し込みを計画する百介らに連れられて別荘まで行くが、そこで撃たれる。

「傷つける鳩」では、置いてきぼりとなった忠男がその星岡家の令嬢雪子（十七、八歳）、雅子未亡人らに救われる。忠男は雛子と遊ぶ夢を見て、気づけばそこに雪子がいた。経過良好となり、外出した忠男は門野博士を訪ねるが博士は関西方面に旅行中で不在であった。「珠の如く」では、百介から受けた恩を思い、逃げられぬお玉の心中が語られる。その後、酔った飛蔵とでたらめ小僧の話を立ち聞きし、忠男を不良にする企みとその背後の事実――忠男が百介の甥である――ということを知る。実は忠男の父は上海で病死し、店の金を番頭に持ち逃げされたため、遺された母子は放浪の挙句、母は死に、忠男は孤児となったのだった。ところが上海に渡った百介は店じまいしたその床下から遺言状を発見、東京の第一銀行に財産が保管されていることを知る。嫡男忠男が不名誉を理由に資格喪失すれば、百介に遺産が入るというのである。さらに、飛蔵らは、遺言状のっとりの相談までしていたのだ。驚いたお玉は、大森の星岡家に行き、雪子に事情を話す。義侠心に駆られた雪子は、忠男を連れて帰京した門野博士を訪れ、一部始終を話す。

「愛！」では、日曜の十一時近く、約束どおり日比谷公園に現れたお玉があとをつけられていることを知り、危険を察知した人々は、悪党の巣窟探しを始める。たまたま皆で上野に出かけ、向島方面まで足を伸ばしたところで、今戸の百介の家に忠男が気づく。ちょうど家の中では、百介と飛蔵、でたらめが争っている途中で、そのどたばたから火事になってしまう。「天使園」では、足に鎖をつけられながらお玉は、急性リウマチスで動きにくく助けを呼ぶ百介を救おうとする。そこへ忠男らが走りこみ、二人を助ける。お玉はその間も、百介を介抱する。そして、その後が語られる。富士山のすその精進湖畔に、雪子と忠男の合資による「天使園」という施設がつくられた。孤児たちが集うその園の園主は忠男。雛子がその夫人となっている。なお、雪子は某実業家令夫人となっている。また、玉子は門野博士の甥にあたる康人夫人となっている。百介も改心し、農場の監督になっていたが、二、三年前に風呂でぽっくり死んだことが最後に述べられ、幕が閉じられる。

以上、「緑の天使」についてはやや詳しく述べてきた。ここからは原作と対照させながら、再話の特徴を指摘していくことにしよう。

まず、両者の全体的な人間関係を比べれば、原作が主人公の保護者ブラウンロウ氏とメイリー家のローズを、それぞれに主人公と縁続きとして設定しているのに対し、再話では、それはない。門野博士と星岡雪子という保護者たちはいずれも、単に善意の存在として登場する。それから、悪の巣窟の主である百介自身が、忠男の縁者として再話では登場する。これは、原作のモンクス――オリヴァーの義兄――に当たる人物を省略したための措置とみなせよう。原作も再話も、登場人物同士の出会いに関しては、ある種の偶然に拠った構成となっている点ではかわりがなく、その点でこれらの設定の良し悪しを言うわけにはいくまい。

次に、再話で新たに作られた人物が、雛子である点。これは、原作のディックにヒントを得た造型かと想像される。ただ、オリヴァーが後日訪ねた折にはすでにディックが死んでいたのに対し、再話では冒頭から、忠男が雛子をかばう立場にあることを明確に示すほか、大団円では忠男の妻となる幸せを得ている。

関連して、役割を相当大きく変えられた人物が、お玉と雪子の二人である点。お玉は、後述するとおり悪の巣窟にいながら一貫して善悪の区別を弁えるばかりか、積極的に忠男の見方になる働きをずっと取り続ける。原作のナンシーが、その行動の所以がややわかりにくい点、最初のオリヴァー連れ戻しでは彼女が張本人である点など、必ずしも全面的に共感しうるわけではないこととは明らかに違う。雪子の場合は、原作のローズがオリヴァー問題の解決に自分から主体的に行動を起こすわけではなく、ハリーからの求婚にもためらい続けているのとは対照的に、中心となって解決に向かう姿勢が明確に描かれている。

そして、悲劇が回避されたという点。原作ではナンシーを殺したことが、当の犯人サイクスを追いつめ自業自得の死に至らしめ、またフェイギンの悪事もばれて死刑になる、という因果が見え、ナンシーの死も或る意味を持たされてはいた。しかし、再話では性的イメージを払拭する目的もあってか、お玉の年齢が引き下げられた。それのみならず、百介とのいわば御恩＝奉公関係を幾度か強調することで、現在の境遇についてお玉自身には全く責任がないことをはっきりさせている。そうしたことが、お玉の救済と幸福の付与につながったのだろう。また、彼女に恩を与えたということが、百介救済の一つの理由にもなってきているように思われる。

これらのことを総合してみると、再話における三人の女性登場人物の造型が、「緑の天使」を原作とは異なるものとして、際立たせる特徴となっている。いずれも十代の、三人の「少女」たち。次には、この三人がどのように描かれているのか、もう少し詳しく検討してみることにする。

四

三人のうち、題名にもなっている「緑の天使」という語と直接的に関連させて登場するのは、雪子である。気を失っていた忠男が雛子のまぼろしを見、そして正気に返る場面では、次のように描かれる。

美しくやさしく緑のうわぎを着たその人は慈愛の涙がこぼれそうに眼をうるませて、につこりとしながらしずかに忠男の頭をなでていた。（略）／緑の天使は美しい手でコップの中から銀色のスプーンで氷のかけらをすくいあげ忠男の口に入れた。忠男ははつとしようきにかえつた。／『雛ちゃんでなかつた』

天使のような雪子は、緑色の上着を着ている。お玉が訪問した際も、雪子はやはり緑を身にまとっていた。

何ともいえぬ上品さと威厳をもつた、珠のように美しい令嬢の緑の上衣がちらとふすまの間に見えた。／『お嬢さま私の忠男さんをお助けください』／お玉は狂気の如く叫んで、泥だらけの足で板の間にあがりこんだ。

雪子の居間の説明の中には、「緑のカーテン」や「緑色のしきもの」も出てきており、どうやら雪子は、予告で語られていた、「緑の服を着てゐる」女の子、といえそうである。そして、天使に比せられるのが外面だけでない証に、雪子は次のような心情を持つ。

『あ、あの娘さんも助けなければ……』／弱々しい雪子の胸にいま猛然と燃え上がつたのはどろぼうの巣に沈んでいるお玉を光明に救い上げようという義侠の感情であつた。

忠男と言いお玉と言い、純粋無垢の少年少女が悪漢のために一生を誤られんとしている、それを救うてやるのはおたがいの義務である。／（略）／雪子は忠男を救うた。さらに今玉子を救わねばならぬ。彼女はすぐ母の室へかけ込んでしさいを語つた。

「義侠の感情」、「義務」感にかられた雪子は、すぐに解決に向けた動きをする。両家の令嬢であるにも関わらぬこの心理も行動も、まさに予告で告げられたとおりの「少女」である。

だが、雪子は決して、「苦しい、辛い、悪い、醜い出来事」に直面しているわけではない。「冬の冷たい風や雨」にさらされ、「雪に凍て付いた地殻の冷酷な鞭」にもめげず、というのが該当するのは、境遇から見て、雛子やお玉であろう。

二人のうち、「待つ」ことによりそれを果たしたのが、雛子である。「髪の毛はまつくろで色白くまゆがはつきりして眼は大きいが、何となくやせて元気に乏しい。忠男はいつもだれよりも雛子がかわいそうだと思つた。」と書かれるように、傍から見れば無力な忠男が唯一、庇護しうる存在が、年下の雛子なのである。托児所経営者夫婦のいさかいのとばっちりで、雛子の弁当がからであったときも、忠男はすぐに自分の分をそっくり与える。（どうせなら、雛子の弁当も詰めるだけの機転をあらかじめきかせられればもっとよかったわけではあるが。）

そして出奔の直前、忠男はひそかに雛子に会う。連れて行ってほしいと願う雛子に、忠男は言い聞かせる。

『そんなことよりもなあ雛ちゃん、ぼくが東京でいどころがきまつたら雛ちゃんを迎えにくるよ、それまで待つてね、なあ』

この言葉を忠実に守り、待ち続けた雛子。しかし作中では、これ以降、実際に姿を見せることはない。それでも、撃たれた後の夢に現れた雛子が「緑のうわぎ」を着ていたことからは（目が覚めてみれば実は雪子だったにせよ）、予告で告げられた描かれるべき少女たりえているとみなせよう。後日譚で忠男の妻となったという告知がされることからは、たしかに雛子は、幸福を得た。もっともそれはむしろ、忠男にとっての幸福という意味があったのではないか、という気もしなくはない。

そして、困難な中で、自身の信念を貫き行動に移した「少女」こそ、お玉なのである。自身も逃げようとした過去があるらしいお玉は、忠男を連れ戻すまい、むしろ救いたいと決意する。

世の中の悪いことをなんにも知らずに正直に玉の如く清らかに育つてきた忠男ちゃん！　あの子だけはどうかして明かるい世界に住わしてやりたい、りつぱな男に出世さしてやりたい。／あの子を救うのは今だ！　警察へ行つて頼み込んで事情を打ちあけてあの子を保護して下さいと頼み込んだらきつときいて下

さるだろう、そうするとあの子だけは孤児園へ行くなり、情けある人の家へ行けるなりして学校へ通うこともできる。／そうだ、この人たちの用事をするふりをして忠男さんを助けてやろう。／お玉はやつと十四才だが、子供ながらも人を救いたいという良心の熱誠は、とつさながらしあんをきめさせた。

忠男が博士に引き取られたと知った後も、情報提供の目的から接触を試みるお玉。彼女の行動を語る直前には、以下のような文章がある。

名玉はうるしの如き闇につゝまれてもその光を失わない。蓮は泥の中にはえても清浄な花を開く。どんな誘惑にあつても、どんな迫害にあつても、生れた時からの美しい性質を失わずに清く明かるくすこやかに育つ人は人の中の名玉であり人の中の名花である。

これこそ、予告で告げられたとおりの「美しい天性」と照応するものではないか。この直後に、小石川に出かけるお玉が登場するということは、やはり彼女が、内面から見て「緑の天使」に該当しうることを示していよう。

そして、彼女の行動力を支えたのは、亡母の言葉である。『よいと思うことならなんにもこわがらずにおやりなさい。悪いと思うことなら、なんにも考えずにすてなさい』というその教えに基づき、お玉は、窮地に陥りながらも百介の救出を図る。

残忍酷薄、強盗、せつとう、さぎ、あらゆる罪を犯して平気でいるこの鬼の如き悪党でも、毎日毎夜地獄の苛責をわが身に加えるこの野獣の如き男でも、むかしは母とともにうえ死を救われた恩人である。／『助けなきやならない』

ここまで徹底した行動を起こさせたお玉の心に対し、雪子も門野博士も、「天使の心」と呼んでそれを賞賛する。

そう、作中で（管見の範囲では）緑の衣装をまとうことはないが、彼女は、まさに予告で述べられた条件を満たす「緑の天使」だったわけである。

こうしてみると、程度の差はあれ、三人とも、求められる「少女」の範疇に入ることがわかる。では、大団円での彼女たちの処遇を、どう考えるべきか。次にそれを、戦後の翻訳叢書などとも関係させて考えてみたい。

五

三人の登場する少女たちは、大団円でいずれも、ふさわしい配偶者を持ったことが告げられていた――忠男の夫人雛子、某実業家令夫人雪子、そして博士夫人となった玉子。そこには、行動する「少女」たちの未来が示されているといってよい。行動の仕方はさまざまであっても、行き着く先は結局、〇〇夫人となる道＝結婚となること。ある意味では、それは、何か先が決まったありきたりの道としか見えにくいかもしれない。ただし、この結末は必ずしも否定されるべきものではないのだろう。たとえば雛子にとっても、お玉にとっても、置かれた境遇に捨て鉢になることもなく、耐えるべきは耐え、行動するべきは相当の勇気を持って行動した結果なのであるから。また、雪子にとっても、良家の令嬢の身としては考えられないほどに説得力ある弁舌と即座の行動性を身につけていたわけであり、結末でも、単に令夫人におさまりかえったのではなく、天使園の共同出資者でもある。

そこにはやはり、再話者側、読者側双方の、期待の枠組みがあったと想定したほうがよかろう。「少女」の行動性を精一杯発揮させた褒賞には、「女性」としてふさわしい結婚をさせることが似つかわしい。それは、単に佐藤紅緑一人の意思というのではなく、連載当時の『少女倶楽部』という場においても、戦後の単行本が刊行された時期においても、有効な見方であったと考えられる。逆に言えば、まだそれ以外の示しうる道が見つかりにくかった、ということでもあろう。

戦後の「少女」向け翻訳叢書の一つに、「講談社マスコット文庫」がある。一九六六年から翌年にかけて三六巻が刊行された同シリーズは、二段組の体裁などから、中学生から高校生程度と比較的対象年齢が高い読者が想定されているように見受けられる。その帯には、「若いあなたに贈る愛と感動の名作」との文言が記されているが、ここに「愛」という語が見えることが興味深い。実は、この叢書は三六巻のうち実に一四巻を、村岡花子が翻訳している。モンゴメリの「赤毛のアン」シリーズが五巻収録されていることも、彼女の翻訳冊数が多い一因だろう。だが、一つには、帯にもある「愛と感動の名作」に対する村岡自身の意識の高さが、この叢書そのものと関係していたのではないか、との推測を起こさせる。

たとえば第一巻『果樹園のセレナーデ』（モンゴメリ）の「解説」では、併載されたロバート・W・チェンバースの「島の少女」という作品に対し、主人公の少女モレイが青年実業家のひたむきな愛情にこたえる結果になるのだが、「若い人々に、清らかな、そして正しい愛情のあり方を思わせるのには、ふさわしい作品」「若い人々の読み物には適度の愛情がはいっている必要がある」「若い心には、まず、「愛」とはどういうものかを知らせなければならない」と述べる。また第一五巻『アンの

夢の家』（モンゴメリ）では、「解説」で、「若いみなさんがたは、結婚について、きっとロマンチックな夢をおもちのことでしょう。」とした上で、登場人物の言葉から「愛と信頼」の大切さをはなむけとして送る。さらに第一六巻『白い子ジカ』（プローティー）では、その物語で一番好きな点として「婦人の自由がもたらすいろいろな愛情の問題、人間関係を、この物語がみごとに整理している点」をあげ、最後には「真実の愛があれば、正しい勇気が生まれてくることを、この物語は教えています。」と結ぶ。こうした村岡の言葉を総合すれば、女性の生き方の選択肢が狭かった時代の中で、若い時期＝結婚以前の段階で真剣に「愛情」の問題を考えることが、最終的に選ぶことになる結婚生活の質そのものを高めることにつながる、という考え方があるように思う。

「緑の天使」に登場する「少女」は、行動力に富んでいた。それは、すでに以前検証した戦後の「少女」向け翻訳・再話叢書の「少女」主人公たちにつながる。そして、三人の結婚が語られる点は、そうした「少女」主人公たちの未来の姿として予定されているはずのものなのだった。だからこそ村岡は、成人女性により近い読者層に向けた叢書で、真摯に「愛」の内実を考えようとさせる。どのみち「結婚」という将来が待っているとしたら、それがより信頼に基づく愛情に満ちたものであってほしい、との願いからである。「マスコット文庫」の刊行年を考えるなら、それは時代的に見て無理のない助言であったと評価すべきであろう。

しかし、「行動する少女」→「結婚」という道筋は、果たして時代性のみによるものなのだろうか。ここで私は、「痛快　世界の冒険文学」第六巻の宗田理が再話した（表記は文）『宝島』（講談社、一九九八）を思い出す。「少年の仲間がほしい」としてジムの相方にまさに行動的な少女エミーを創造した彼は、大団円で、二人を娶わせている。ジムにとって「最大の宝」は、「エミー」であったというのである。これはあたかも、忠男に雛子が配されたのと類似しているとはいえまいか。とすれば、「結婚する女性」という結末は、男性再話者にとっての何らかの願望の反映とも受け止められうる。

「行動する少女」に託されたものと、その行方について、戦後の叢書類とそれにさかのぼる一翻案作品を結び合わせ、考察をしてきた。枠組みの想定と、作品による検証をさらに繰り返す中で、「少女」造型、「少女」読者意識と再話行為の関係を、さらに多面的に、深化もさせつつ、検討を続けていくこととしたい。

＊本稿は平成十九年度科学研究費補助金基盤研究（C）「「少女」向け名作再話の成立と展開――児童文学における翻訳叢書とジェンダー意識」に基づく研究の一環である。
＊本稿の骨子は、日本児童文学学会第四六回研究大会（於・仙台市戦災復興記念館、二〇〇七年十月二十日（土））において、発表した。